

誤解 多義的な文

切替英雄

2012年12月10日

1 お客様は神様です

三波春夫の娘、三波美夕紀のお話を新聞で読んだ。^{*1}

三波春夫は2001年に亡くなったが、生前は特にお年寄りに人気のある浪曲師・歌手であった。テレビの歌謡番組によく出演されていたのを記憶している。また、舞台の上から「お客様は神様です」と観客に言われる場面もテレビで見たことがある。この言葉は「デビュー5年目の春、37歳、今から51年前の地方公演で飛び出した」とのことである。今もいろいろな人の口から聞くことがある。人は知らず、耳にするたびにいやな言葉だな、といくらか不快に思っていた。

また、「三波春夫の笑顔」というのがあって、今では懐かしく思い出されるが、テレビで見た当時は違和感があった。しかし、それは、春夫の信念を示すものであって、「この社会でいつも明るい心で人に接するのは努力がいる」「いつも笑顔を向けることができる心でいたい」というのがあの笑顔を浮かべる春夫の気持ちであったという。

お客様は神様です

^{*1} 朝日新聞 2012年9月6日

この有名な言葉について美夕紀は「父の真意とはまったく違う形で理解されているので困っています」と言われる。つまり僕のようなとり方を残念に思われている。

舞台は「真剣勝負」の場であるから、「まるで神前に立った時のように、澄み切った心でないと完璧な歌はうたえない」と、かつて春夫は美夕紀に語ったそうだ。「お客様を神様のように見立て、雑念を払って歌う」という覚悟を示す言葉なのだ。だから「お客様へのゴマすりでも、へつらいの言葉でもなかったのです」と美夕紀は言われる。

おのれの覚悟を示す言葉を惹句にし、舞台やスクリーンである笑顔を浮かべながら言ったという話にいくらか疑いを持つ。^{*2} また、そのようにしておのれを装う者の孤独に想いを馳せる。しかし、今それは問題にしない。美夕紀が言われたとおりとして、ひとつの言葉が最初の話し手・書き手の意図とまったく異なる意味にとられ、さらにその解が流布する、という現象の一例と見る。

2 地の涯に倅せありと来しが雪

北海道に細谷源二(1906—1970)という俳人がいた。昭和20年7月に東京から十勝の豊頃に入植した。^{*3}「最初の入植地は下農野牛^{*4}の泥炭地であつたらしい。歩けばフワフワして、妻は布団の上を歩くようだと無邪気に表現した。雪が近くなるころ、多くの入植者たちはこの地を捨て去って行った。動くに動けない者だけがとり残された。」(「豊頃町史」インターネットで閲

^{*2} しかし舞台上に立つものは本当に神を見ているのかもしれない。やはり朝日新聞に、1998年に亡くなった中西龍^{りゅう}というNHKのアナウンサーを回想する記事がある。中西は、「斜め上を見てうたう(都)はるみのポーズを評して」こう言ったそうだ。「劇場にいる歌の神様を仰ぎ見ている」(2013年1月7日)

^{*3} 「農民画家」といわれる神田日勝(1937—1970)の家族もやはり東京から十勝に入植したが、鹿追にたどり着いた翌日、終戦となった。

^{*4} しものやうし

覧) 源二は戦後まもなくして離農した。

源二という俳人を知らなかったおよそ四十年前、はたちの頃、山本健吉の『現代俳句』(角川書店 昭和 51 年改版 9 版)で

地の涯^{*5}に倅せありと来しが雪 源二

という句を知った。それは東西三鬼の句

限りなく降る雪何をもたらすや 三鬼

について述べている箇所⁵に引かれていた(400 頁)。僕はこれを引いた健吉の真意がよく理解できなかったのであろう。源二の「雪」を三鬼の「雪」、また中村草田男の

降る雪や明治は遠くなり⁶にけり 草田男

の「雪」と同じように理解した。また、1952 年の歌「雪の降る街を」(内村直也作詞、中田喜直作曲)

雪の降る街を 雪の降る街を
思い出だけが 通りすぎてゆく
雪の降る街を
遠い国から おちてくる
この思い出を この思い出を
いつの日か包まん
あたたかき幸福^{しあわせ}の ほほえみ

が頭の中に流れたのを覚えている。^{*6} また、物理学者中谷宇吉郎の

雪は天からの手紙である

^{*5} 健吉は「果」と示している。

^{*6} 引用した歌詞の「街」は「町」かもしれない。

という有名な言葉も思い浮かんだ。これは健吉の文にも引いてある。さらに、アンデルセンの「マッチ売りの少女」の凍え死に行く女の子に降りかかる雪を思い出した。

以上、いずれも、いわば暖かい雪だ。降る雪に、暖かくふんわりとした回想的な気分や心地よい夢想をもよおすのは僕だけではあるまい。僕は源二の雪が暖かな雪だと四十年も誤解していた。あらゆる希望を打ち砕く厳しい雪とは思ひもしなかった。

今年になって、今までの僕の解が誤りではないか、という疑いが生まれた。それは、新村正人氏の好エッセー（『図書館だより』（33巻4号、北海学園大学図書館、2012年春）を読む機会があり、そこではこれが一種絶望の句であるとして引かれていたからである。半信半疑、というよりも、むしろ新村氏の誤読ではないかと思われ、また、新村氏の解では「北の涯とはいえ、いい所だと思ってやってきたが、切なく冷たい雪が降ってきて、裏切られた思いである」という凡庸な感慨を述べる句になるのではないかとも思われた。そこで俳人である柳田寛氏にお手紙を差し上げお尋ねすると、返書を賜り、「来しが雪」の「雪」には

情緒的なものは感じられません

と、僕の解は一蹴された。また、開拓移民団としての渡道は

悲愴な気持ちを抱いてのことではなかったかと推察します

ともお書きである。「あまっちょろい」という手痛い言葉もあった。かくて痛棒を浴び、源二の生涯を多少知るにしたがい、徐々におのれの解釈に対する執着が消え、今では凡庸な句とはとても思えず、また肅然と襟を正す気持ちである。

新村、柳田両氏の解は、「来しが」の「が」を接続助詞とみて、「けれども」の意味にとる（来たけれども）。それが正解だ。僕の誤りは「が」を格助詞にとったことにある（来たのが雪）。

さあ、「来き」（「来し」はその連体形）の主語を「源二」ととるか（正解）、
「雪」ととるか（誤解）。

しかしこの問題は、文法的には決着がつかない。正解に至るためには新興
俳句運動に対する弾圧、受刑、十勝入植および離農にいたる源二の厳しい人
生を知らなければならない。

「来し」の「し」は過去（回想）の助動詞「き」の連体形だが、これには接
続助詞の「が」も格助詞の「が」も続きえる。だから、源二の終戦前後の事
情および人柄を斟酌しなければ、文法的にはどちらの解も正しいとせざるを
えない。

接続助詞「が」の用例

巳の時ばかりなりけるが、日も漸く暮れぬ（今昔一六）

格助詞「が」の用例

母の離れて行くが悲しき（万二〇）*7

俳句でなければ韻律の制約に掣肘されることもない。解が一つに定まるよ
うに、拍の制限を無視して、

地の涯に倅せありと来しが、雪降る

とすれば源二の真意は伝わる（「が」と「雪」の間に休止が入る。休止を入れ
なければ曖昧さは解消できない。ただ、こうすると俳句ではなくなる）。

格助詞「が」については、上の例文のように

連体形＋格助詞「が」＋体言

という措辞が古代に有力であったから、それが念頭にあれば「来たのが雪」
という読みは必至と言ってもあながち強弁ではない。そのような「が」の例

*7 いずれの用例も『広辞苑』から。

をもう一つあげれば、

清き河瀬を見るがさやけさ (万一七三七)*8

また、完了の助動詞「つ」（作為的・意思的）か「ぬ」（無作為的・自然推移的）のどちらかを使う手がある。が、そうするといずれも拍が余る。

「つ」の用例

見るべき程ほどの事ことは見みつ、いまは自害じがいせん（壇ノ浦のいくさにおける
たいらのとももり平知盛のいまわの言葉。『平家物語』下（日本古典文学大系 33. 岩波書店. 1960. 342 頁）

「ぬ」の用例

卯うの花の、匂ふ垣根に
時ほととぎす鳥、早も来鳴きて
しのびね忍音もらす、夏は来ぬ（佐佐木信綱作詞・小山作之助作曲「夏は来ぬ」）

正解のように了解されたいのなら、「つ」を使う。

来つるが雪

僕の犯したような誤読を正解として誘導したいのなら、「ぬ」を使う。

来ぬるが雪

だがそれでは拍があふれるので便法として過去の「き」が使われたのかもしれない（「つる」「ぬる」はそれぞれ「つ」「ぬ」の連体形）。余りいいことと僕は思わないが、詩ではこういうことをして明晰さを犠牲にすることがよく行われる。そこで多義的になり、僕のような誤解を生む。これは僕だけの誤解ではない。数十名の学生にこの俳句を示して、また、源二が特高に捕まり

*8 『岩波古語辞典』1974年 1445頁

牢屋・刑務所に入れられた経験を有する昭和初年以来の俳人で、終戦直前に東京から十勝豊頃に入植したとだけ予備知識を与えて、

- A 地の果てに幸せがあると思って来たけれども、冷酷無残な雪が降ってきて希望が打ち砕かれた
- B 地の果てにも幸せがあると告げるような心に満ちる雪が降ってきて、暖かく幸せな気持ちになった

どちらにとるか、と尋ねたところ、ほとんどすべての学生が B に手を挙げた。A に同意したのはたった一名だった。その女子学生は「小林多喜二を思い出したから」と判断の理由を述べた。予備知識が与えられなかったらどうであつたらう。また、文芸的なことで信頼がおける友人に問うとやはり B の解を選んだ。僕も僕の友人も学生の大半も人生に対して大変甘い人間と言わざるをえない。

3 賓不顧矣

論語の郷党編に次のような文がある。

賓	賓	君
不	退	招
顧	レ	使
矣。	必	擯。
	復	
(郷党)	命	(中略)
	曰、	

この読みは伝統的なもので、たとえば、朱子の『論語集注』の説に従ったという宇野哲人の『論語新釈』(大札記念昭和漢文叢書、弘道館 1929 年 / 講

談社学術文庫 1980 年 276-7 頁) では、

君が孔子を召して来賓の接待を命じると(中略) 来賓が退出すると、孔子は必ず君に復命して「お客様は後を顧みずに御帰りになりました。」と日って、君の心をくつろがせる。

と通釈し、「賓不顧」に対して、

^{いにしえ}古は賓客は礼が畢^{おわ}って出る時は回顧しないのが礼であったから、「賓は去って後を顧みません」と日って、君の賓に対する敬礼をゆるめようとするのである。

と語釈を加えている。なお、帰りぎわ後ろを振り向かないのを古の礼法とする解釈は『集注』には見えず『朱子語類』に見られる(中支出版社。上巻 p.545)。同僚の大谷通順氏(中国語学)に教えられた。

また、宮崎市定(東洋史)によれば、宋以来の注釈家の間では、

来客はご馳走になり、手厚いもてなしを受けたので、たいへん満足して、もう後に未練はないといって顧みもせずさっさと行ってしまった、と、いって復命した(『論語の新しい読み方』岩波書店 200 年 37 頁)

という理解が一般的だったという。現在最も流布していると思われる金谷治訳注『論語』(岩波書店 1963 年)はそれに従っている。「お客様はふりかえりませんでした(満足して帰られた)。(130-1 頁)

宮崎は、客が振り返らなかったというのは「どうもおかしい」と評する。

立ち去るときに「顧みず」というのは、普通の立ち去り方ではないのです。むしろ何事かが起こり、特に喧嘩などをして、さっさと帰って行くときに、よく用いられる表現であります。(37 頁)

とのことである。だから、

賓
不
レ
顧
矣。

と読むべきだという。

これは中国でも日本でも行われることですが、来客が立ち去るときには主人、あるいは接待係は門まで送りに出て、見送ると、来客のほうでも、立ち去りがけにうしろのほうにふり向いて手を振ったり、頭を下げたりして帰って行き、ずっと行ったところ、または曲がり角などで、もう一度うしろを振り返って、最後の合図をして立ち去っていきます。何べんか後を顧みて挨拶する。それが礼式であります。見送るほうでも、客が遠のくまで見送っている。

ですから孔子が言ったことは、「必ず復命して曰く、賓顧みずなりぬ。」客がもう顧みなくなったのを見届けて私は帰ってきました、という意味に違いないのであります。そう解釈すれば意味がはっきりわかると思います（37-38）。

なお、この解釈はすでに James Legge (1815—1897) というイギリスの支那学者がとったものとのことで、この箇所は

not turning round any more

と訳されているという（38頁）。

なお、矣は、文の終結に用いる助辞で、也と同じく断定・決定などの意を表すなどと説明されていて、訓読では読まない。しかし、「廣雅」「釈詁」三では「矣ハ止ムル也」とされている（諸橋轍次、鎌田正、米山寅太郎『広漢和辞典』中巻 1347頁）。何が止むのかわからないが、大谷通順氏によれば、

「不 一 矣」という形は継続していた事柄が終了することを示すとのことである。だから、文意はあれこれ考慮しなくても直ちに分かることであって、客は幾度も振り返って礼をしたが、やがてそれを止め視野から消えた、という意味が初めから、判然と示されているそうである。ただし、あらゆる人文的現象に絶対の解釈はない、と留保するのが心構えであるべきだから、Leggeや宮崎の解、さらに同僚大谷氏の解が絶対だ、と主張するつもりはない。ただ、朱子（古代礼法派）の解釈あるいは反朱子（満足派）的解釈を疑わず世に説いてきた人たちは苦しかりう。

また、宮崎氏にあっては、漢学ではなく、言語学的漢文研究にいくらかでも目を通していたら、なにも、鼻から解は決まっていたのではなかったか、と申し上げたい。ヨーロッパのシノロジー侮るべからず。

いずれにせよ論語を結集・編纂した孔子の孫弟子たちの伝えたかった文意と、後代の論語読み達の了解、というよりも苦し紛れの解釈が異なっているという点では、三波春夫の言葉や源二の俳句で確認したひとつの言葉が最初の話し手の意図とまったく異なる意味にとられ、かつ流布することがある、という現象の例とみられる。

4 言語学は誤解をどう捉えるか

聞き手あるいは読み手は、話し手、書き手が伝えたかったことをできるだけ正確に理解するよう努力すべきである。

まずは使用された言語をある程度知らなければならない。でなければ話にならない。

ここで言語とは、意味を音声・文字に、音声・文字を意味に変える変換装置のことであって、一つの言語共同体の構成員皆に共有され、各自の脳髓に備わっているもののことである。「賓不顧矣」にせよ何にせよ、その意味を了解するためには、論語を編纂した孔子の孫弟子達の脳髓にしたがって読むしかないから、彼らの言語（変換装置）を研究・習得し、おのれの脳髓に叩き

込まなければならぬ。不完全ならざるをえないけれども孫弟子達の言語的インフラをおのれも脳髓に整備しなければならぬ。それでこそ、孔子の教えに近づきえるのではないか。論語読み達は、読書百遍意自ズカラ通ズなどと称して、それをおろそかにしたのではなからうか。この場合、論語に現れる「矣」の意味・機能を軽んじていたと思われる。否、軽んじているどころか、真意を見つけることより、おのれの思い込みをテキストに読み込むこと、孔子を捉えるよりも、おのれの思いを孔子に投影することに夢中になっていたのではなからうか。確かにいたしかたない。おのれを空しくできないのは俗人の宿命だ。「訓読では読まない」などという態度がそもそも間違っている。あるのに見ない。見ないことが教義になる。

では、話し手（書き手）、すなわち春夫・源二と聞き手（読み手）、すなわち私たちがほぼ同一の言語を共有している場合、なぜ誤解が生まれたのだろう。

言葉の真意 A と誤解 B、しかし言葉に忠実であるから誤解 B もまったくの誤りとはいえない、つまり A, B どちらにも取れるという現象は、若い娘と見えたものが、あるときから突然鉤鼻の恐ろしげな老婆と見える、あのだまし絵（多義図形）を思い出させる。だが、春夫と源二の例は、だまし絵に似ている点では同じだが、根本的には区別しなければならない現象である。

それを考える前に、「言語」という言語学の用語のもう一つの意味に触れておきたい。それはソシユール Saussure のラング langue である。小林英夫が「言語」と訳したが、服部四郎は「言語作品」と呼んでいる。要は脳髓の RAM (Random Access Memory) に生成された記号列であって、話し手はこれにもとづき音声器官を動かし、聞き手は聴覚器官の反応にもとづきおのれの RAM にこれを複写する。langue はデジタルだから（つまり、離散的記号の列だから）完全に複写される。この複写された langue にもとづいて聞き手は話し手の伝えたかった意味を了解する。脳髓に生成された記号列がどのような生理的実体のものかは分からないが、signifiant 「意味するもの」と signifié 「意味されるもの」が結合したものだ。「記号（列）」という語を

「意味するもの」（音韻、文字）と理解している人によく出会うが、これは完全に誤りである。米国の言語学界やそれに親しんでいる日本の言語学者の間では「記号（列）」の代わりに form「形式」「形」という用語がよく用いられる。それはそれでかまわないが、しかしそのさいも、「形式」ないし「形」の概念を音韻形式（意味するものの形式）と同一視して、それに意味形式（意味されるものの形式）を含めていない人をときおり見かける。はなはだ遺憾である。言語にあっては、音も意味も形式化される、ということがお分かりでない。言語は形である。

論語読みたちの誤読は中国春秋時代に行われていた言語（変換装置）の習得が不完全であったからである。だから、孔子の孫弟子たちのと異なる langue を脳髄に生成してしまった。langue 複写の失敗である。

源二の句の場合、これもまた langue 複写の失敗であるが、論語とは違って、作者、読み手の脳髄にはほぼ同じ変換装置が備わっている。誤解は同音異義語の取り違い（接続助詞の「が」を格助詞の「が」に読む）に起因する。その結果、作者の源二と鑑賞者であるかつての僕は違う langue を見ているのである。

春夫の言葉を聞いた者は、真意を汲み取れなかった者も、真意を正しく捉ええた者がいたとしたら、そういう者も、また春夫自身も、同一の langue を見ている。それは「お客様」という主語と「神様」という述語が「です」という繫辞で繋がれた命題にほかならない。これは日本語ができる者なら誰の脳髄にも正確に複写される langue である。しかし大方には春夫の想いは通じなかった。了解の失敗である。

春夫の言葉を聞いた者たちの誤解は、言語を媒介にした相互理解の根源的な難しさ、言語という離散的記号を用いる通信手段の越えられない限界を示す好例である。言語は信じるに足りないときえ思われる。